

今後への期待——30周年に寄せて——

保健管理センター分室長 白石恵理子

滋賀大にきて13年目、保健管理センターの分室長になって3年目になる。分室長と言っても、私は一介の教員であって医学的見識はほとんどない素人であり、分室長になって保健管理センターが果たしている役割をあらためて知った。そして、今後のさらなる発展を強く願っている。

滋賀大に着任する前の大学や専門学校での勤務も含めると、青年期の学生たちとのかかわりは20年近くになるが、10歳代終わりから20歳代前半という時期が、一人ひとりの学生にとって、その後の人生を決めるいかに重要な時期であるかを実感してきた。大学に入学した頃の自分自身を振り返っても（私はある大学の教育学部だったのだが）、「子どもを育てる教育という営みに魅力を感じて」とか「子どもが主体的に力を発揮できる教育のあり方を考えたい」とか、自分を納得させるもっともらしい理由はいろいろと考えていたものの、やっぱり偏差値とかプライドとかに左右されての進路決定だったのだと思う。しかし、大学の4年間での学問と友との出会いは自分の人生を大きく決定づけるものとなった。また、親元を離れての下宿生活は、まがりなりにも自分で自分の生活をくみたてる面白さを知ることになった。もちろん親のありがたさも知った。

それまでの親に依存していた生活から、依存構造をくみかえ、ときに友や先輩たちと語り、自分自身にも問いかけながら自分の人生をつくりかえていくという青年期の営みは、古来より営々と続けられてきたものであろう。しかし、そのプロセスにおいて多くの苦悩やためらいがあることも事実である。社会の変化にともない、思春期・青年期というライフステージは確実にのびているらしいが、実際、学生たちに「幼さ」を感じることも少なくない。しかし、その「幼さ」を嘆くのではなく、揺れや不安のさなかにある学生たちが少しでも前に進んでいけるような応援をしていきたいと思う。そうした学生や、学生を直接指導する教員にとって、これまでも保健管理センターは支えになってきたのだが、今後、ますますその役割は大きくなっていくだろう。とくに教員を志望する学生にとっては、教育実習は重要な成長の場であると同時に、大きなストレスになることも多く、その前後に体調を崩すこともある。そんな学生への直接・間接の支援として、保健管理センターがどのような役割を担えるのか、さらに考えてみたい。